

ミニ・シリーズ:農に関わる営みと暮らし ~日本における様々な動き~

その3: ^{しぜんのう}自然農と、小川町の循環型農業への取り組み

岡山県倉敷市にて、「自然農学びの会 おかやま」による苗代づくりに参加した。会では、自然農*を実践している川口由一かわぐちよしかず氏になり、その勉強と啓蒙を行っている。自然農とは、奈良県の専業農家の長男として育った同氏が、農薬により健康を害したことをきっかけとして始めた農法で、草や虫を敵としない無肥料・無農薬・不耕起(刈払いはOK)を基本とする自然の生命の営みに沿ったもので、既に20年以上実践している(それ以前に、近代農法による農業を20年間体験している。)。自然の力に任せる農法といっても採集生活や放任栽培ではなく、必要に応じて手を貸してやる栽培農である。訪問の5日前には、120人の参加者ととも、同氏による田ごしらえや栽培についての実演・指導・講演が行われた。ここでは1反ほどの田んぼを借りており、自然農による栽培で5年目を迎える。例えば田植えも、不耕起のため生えている草を除いて苗を土の上に置き、また草を戻すといった要領で行われる。この農法が、あらゆる条件下での栽培方法の全てであるとは言わないが、我々人間も自然界に生かされる単なる一動物として、化学肥料や農薬によって作物をコントロールする農業は100%正しいか、と聞かれて「100%イエス」とは言えないだろう。このほか自然農を学ぶ場として、全国に20ヶ所以上の自然農塾が開かれており、また自然農を実践している農家もいる。

*「自然農」補足説明: ここでは有機農法でさえも作物にとっては過ぎた栄養を与えて(例えば、稲作ではレンゲソウによる窒素補給も必要ない。)ぶくぶくに熟した作物を作る農法であり、その作物を食することは身体にとって良くない、と理解する。同氏は、漢方医学を独学で修得し、現在は全国の自然農を実践する人たちの場に足を運び啓蒙・普及(講演・実演・指導)を行っている。考え方は、自然農法の福岡正信氏や MOA 農法の岡田茂吉氏などに通じるところがあるようだ。同氏の田圃において近代農法から自然農に切り替えた当初3年間は全くの無収穫であったが、4年目以降は以前との収量差は殆どないという。

埼玉県比企郡小川町。西に秩父連山を望み同県のほぼ中央に位置し、以前は伝統工芸として手漉き和紙の生産が盛んに行われていた地域である。ここでは、1971年以来有機農業に取り組んできた金子美登かねみよしのり氏を代表として、同氏のもとで学んだ人々を中心とする約20軒の農家が「小川町有機農業生産グループ」として循環型農業に取り組んでいる。今回、毎月第二土曜日に催される、同町で取り組んでいる循環型農業の技術や取り組みを紹介する“オープンデイ”と称した見学会に参加した。同グループでは、有機農業生産者と消費者との提携による地域の食料自給を目指すだけでなく、合鴨による水田除草、裏の里山の落ち葉を利用した堆肥作り、自然卵平飼い養鶏、種苗の自家採取と種苗交換会の開催、雑穀の栽培、上総堀りの実践、“NPO法人小川町風土活用センター”を中心としたバイオガスシステム(家畜の糞尿や農産物残渣といった有機物からメタンガス;燃料と、嫌気性発酵液肥;有機質肥料を作る技術)／太陽光発電装置(揚水や電柵に利用する。)/Vegetable Diesel Fuel;VDF(天ぷら廃油によるディーゼルエンジン用代替燃料で排出する黒煙は3分の1、NOxはゼロ。)/間伐材利用のガラス温室/炭焼き/薪ストーブといったエネルギー自給への実践や、地元産の有機農産物を使って地元の産物が農産加工品(日本酒、乾しうどん)を作るといった地場産業との連携、などといったさまざまな取り組みがなされている。また小川町も、バイオガスプラントに対して設備費を負担するほか、現在60軒の家庭から生ゴミの収集を行うといった積極的な支援を行っている。

昭和40年代以前の、一戸当たりの耕地面積が小さい中でも家畜・役畜を飼い、自給をベースとした小規模有畜複合農業をはじめとした第一次産業が中心であった頃は、自然に物質が循環する持続性のある社会であった。それ以降、農業機械を使い化学肥料・農薬を施用する農法が当たり前になったが、それらを極力使わず自然と共生した持続性のある循環型農業なしでは我々の未来はあり得ないことを、これらは示すモデルであろう。



自然農による苗代作り



Vegetable Diesel Fuel によるトラクター稼



バイオガス液肥貯留槽